県医活動報告

第11回男女共同参画フォーラム

日　時：平成27年7月25日(土)
場　所：ホテルクレメント徳島(徳島市)
報告者：常任理事　三倉　　剛

テーマ「共同から協働へ～多様性を生かしたワークシェアリング～」
徳島県は女性の社会進出（管理職等の役職者の割合）が日本一の県である。
徳島県医師会常任理事14人中の4名が女性で、全国一。

1．開会あいさつ：横倉会長，川島徳島県医師会長，県知事（鱧，藍，－－－）
2．男女共同参画員会報告　小笠原真澄委員長
　女性医師支援センター事業報告　保坂シゲリ
3．基調講演「あなたが輝く働き方～秘訣はワークライフバランス～」
　㈱ワークライフバランス代表取締役社長　小室淑恵
　8時間で仕事をいかに終わらせうるか？を考えることから一日が始まる。
　人口ボーナス期（1960～1990年中頃)→経済発展，ところが現在の日本は経済成長が鈍化して高齢者が増え社会保障費が増大する（人口オーナス期)。日本は少子化対策の失敗（待機児童ゼロに本気で取り組まなかった，長時間労働体制を改善できなかった）ツケ。そのために日本は急速にオーナス期に入ってしまった。オーナス期にふさわしい働き方に変化させれば，経済成長が生まれうる。オーナス期には①なるべく男女共に働く，②なるべく短時間で働く(労働生産性の向上)，③なるべく違う条件の人をそろえるという働き方を揃えるというルールにチェンジする必要がある。
　ワークライフバランスは福利厚生ではなく，経営戦略である。「期間あたり生産性」→「時間当たり生産性」へ。(パートや短時間正社員の活用)。

4．シンポジウム①
　1）隠岐広域連合立隠岐島前病院　院長　白石　吉彦 夫婦(共に自治医大卒)でへき地医療に取り組む
　島前→3診療所と病院：院長として，医師・看護師の確保，地域医療支援ブロック制を組んだ，電子カルテで島根県立中央病院とつなぐ，テレビ会議と研修会の整備。外科系医師不在→診察室でのエコー（腰痛，肩痛（エコーガイド下関節注射）鎮痛治療。
　島後→隠岐病院（115床）

　2）徳島県立鳴門病院内科医長　早渕　修
　医師12年目の35歳（平成16年徳島大卒）
　医師3年目に結婚，3男の父親
　男性医師の22.9％が女性医師と結婚。反対は67.9％。(日経メディカルカデット)
　今後医師カップルの増加。男性の育児参加が必要とされる。
　育休取得の経験

3）徳島赤十字病院代謝内分泌外科　副部長　川中妙子

指導医の立場になって，出産育児を経験した。夫は放射線治療医。職場は乳腺外科の一人医長。産休4週＋育休6か月（医局からの週一回のバックアップ），復帰後通常勤務で外来，手術。当直，外科オンコールは免除。研究会，会議の参加は難しい。しかし遠くの学会参加は家族で。看護休暇や病児保育の利用（手術を遅らせてもらったこともある）。術後の責任ある対応において難しいと感じている。

4）徳島県立中央病院　呼吸器内科医長　稲山真美

卒後15年目，大学呼吸器内科入局同期6人全員女性。卒後すぐは医学医療に集中，メンター探し。大学院生活。独身バリバリ期29－33歳。高知から徳島へ。結婚。35歳で初産。

利用できるものは何でも利用する。

徳大5年生がファシリテーターとなってのシンポジウム。白石医師の話，子守ばあさんの支えがあってよかった。トラブル時にどうやって乗り切れるか？主治医制だがチーム制（この進化が必要）。10年目の女性医師の体験，正直な気持ち（家庭も大事にしたいけど，勉強もしたい）。

5．シンポジウム②

「共同から協働へ～多様性を生かしたワークシェリング～」

1）手稲渓仁会病院　臨床教育担当者　Shadia Constantine

米国で総合内科のレジデント教育を受けた。米国でもgender wage gapがある。男性100セントに対し女性76セント。米国女性医師の給料は男性のそれの80％以下。米国医学校教授の女性の割合は20％。米国の女性医師は燃え尽き症候群になりやすい。

「自分第一」で。毎日「to do list」をつける。自分自身を楽しくさせることが重要である。『lean in』という本が自分を変えるきっかけになった。

2）国立保健医療科学院母子保健担当主任研究官　吉田穂波

1998年聖路加で臨床研修。その後産婦人科医に。31歳からドイツ，英国，米国で医師研修を受けている。5人の子がいる。ドイツでは育休が徹底されているので，3歳児以下を預かってくれる施設がない。ボストンでの保育料が高い（月50万円）。そうした諸外国で制度も整わず，お金もかかる中で女性が仕事を続けているのは『mind set』が重要か？頼られるって意外と嬉しい，楽しい。だから頼り・頼られの習慣をつけよう。育休を褒める習慣・体制を。

3）徳島大学消化器・移植外科助教　高須千絵

卒後9年目，途中米国の移植外科に1年間留学。11か月の子供あり。

4）ジュニアドクターズネットワーク副代表　三島千明

若い医師の多様な生き方をネットワークを通じて模索している。

6．フォーラム宣言

7．次回開催県（栃木）挨拶

8．閉会